

釧路市大楽毛砂丘の遺跡について

澤 四郎^{*} 西 幸隆^{*} 松田 猛^{**}

Notes on the Sites in the Otanoshike Sand dune Kushiro.

Shirô Sawa Yukitaka Nishi Takeshi Matsuda

1. はじめに

釧路地方の遺跡については、釧路湿原をとりまく周縁の台地や海岸台地に400を越える数の遺跡が確認されているが(澤・西1977)、いずれも丘陵・台地や河岸段丘などに限られ、これらと明らかに高低差をもつ沖積低地における遺跡の存在についてはこれまで皆無であった。「釧路平原」として総称されるこの沖積低地は、釧路市の西方の海岸線に横走する砂丘地と、背後の湿原である泥炭地とから成っている。これらの砂丘地については、その地形的性状や生成について既に論じられているところである(岡崎他1966・岡崎・鈴木1975)。

筆者らは、かねてより縄文海進の過程で成立した砂丘と、その上層に堆積した火山灰を含む腐植土層などから、これらの砂丘地における遺跡の存在について考えてきた。このことは、後述するが明治21年の坪井正五郎(坪井・1888)による大楽毛・釧路間の竪穴群の記載や、昭和33年当時の釧路考古学研究会員による新富士海岸の竪穴様落ち込み^(註)の存在する話などからも十分にその可能性を予測させるものであった。

その後、昭和48年に至り、偶然にも小学生によって大楽毛海岸に近い砂丘地より擦文式土器が採集された。さらに、昭和55年には大楽毛中学校裏手の砂丘地より縄文中期の土器が採集され、その後の現地踏査からも砂丘地における遺跡の存在について確認したところである。これらの事実から、大楽毛・釧路間の竪穴群や新富士海岸の竪穴様落ち込みについても、砂丘地における遺跡として認識することが可能となった。

以上のような経過から、本稿では砂丘の生成と先史時代における土地利用を考える上で重要な資料を提示する考え、ここに大楽毛砂丘1遺跡採集の遺物を紹介し、沖積低地における遺跡立地について触れておきたい。

尚、大楽毛周辺の砂丘地については、北海道教育大学釧路分校教授岡崎由夫氏に種々御教示を賜った。ここに厚く御礼申し上げる次第である。

2. 砂丘地の概要

釧路市の海岸線は、旧釧路川東方の急崖を呈する岩石海岸と、西方では太平洋岸に沿って狭長に延びる砂丘地とから成り、背後に泥炭地・釧路湿原が横たわる。

砂丘地については、これまでたびたび論じられているところであるが(岡崎1966・岡崎他1966・1975・1977)、それによると砂丘は、旧釧路川から西方の大楽毛・庶路海岸まで達し東西の長さ約19.5km、幅は海岸から1.3~1.6kmあり、大楽毛地区では最大10列からなる砂丘列を形成している(第2図)。大楽毛から庶路にかけての海岸線と段丘間の狭長な海岸平地では、3~4列の砂丘列がみられる(岡崎1966)。砂丘列の列間の幅は100~200mであるが、新富士地区から東方では融合して砂丘列はつくらず、大小の不規則な形状を呈している。高度は釧路川より東方では5mを越えないが、西方では6~8mといずれも背後の湿原面よりは高い。砂丘は海岸ほど新しく、また高く、内陸ほど低く固定化が進んでいるという(岡崎・鈴木1975)。砂丘列の間は低く、海岸付近では横走し、内陸から縦に流路をとる河川が砂丘列の間の低地を縫うようにゆるやかに蛇行しており、河川と共に沼も見うけられたが、現在では開発が進み原形を失っている。

砂丘の形成については、「低地を広く満たした海湾期に形成された湾口に、沿岸砂州が海面上に次々と姿を現わして、旧海岸線沿いに砂丘群を配列し残し去った」(岡崎・鈴木1975)とされ、海退の進行により順次砂丘列を配列する現象からすると、最も湿原に接した固定化が進んだ砂丘列の形成は、少なくとも縄文時代中期には既に成立していたとみられる。縄文海進最高頂期の海水面の高さは、一般に2~4m内外と考えられている。従って、砂丘地において、縄文時代中期以降についても土地利用が行われていたことは十分に予想されるところである。

3. 大楽毛砂丘の遺跡

大楽毛砂丘1遺跡 本遺跡は10列からなる砂丘列の2

列目にあり、竜神川に流入する星ヶ浦川の右岸、大楽毛北1丁目に位置する。大楽毛駅から北東方向に直線距離で2.3km、国道38号線からは北へ500mのところにある。付近一帯の砂丘は多くが宅地造成工事により削平されているが、遺物の採集された地点は部分的に残されている。

2列目の砂丘列は、本遺跡周辺では比較的不規則な形状を呈しており、東方1kmに位置する1列目の砂丘列を除くと、西方を含めた周辺では最初に形成された砂丘である。遺跡をのせる砂丘の海拔高度はおよそ6mである。

本遺跡は、昭和55年、釧路市立大楽毛小学校生徒吉田靖広君によって発見され、当時担任であった現釧路市立東中学校教諭村上肇氏により博物館へ遺物が持ち込まれたものである。遺物は、第1図に示した土器が唯一の資料である。

土器は底部を欠いているが、現器高29.7cm、口径17.8cmの筒形土器である。胎土には径2～10mmの小石と少量の繊維を含み、厚さ1.0～1.2cmを計る。地文として単節の羽状縄文が旋されており、羽状の境目となる口唇下約5cmの所に、幅1.5cmの無文帯が横環する。この無文帯は指による磨消しによって作出されたと思われる若干窪み、その押し上げられた粘土が低い隆帯を形作っている。無文帯の上には円形刺突文が並び、裏面に突瘤を残す。刺突文は、約1cmで上下もしくは左右の2度の刺突による。口唇直下と隆帯直上には、半截竹管状工具によって下か

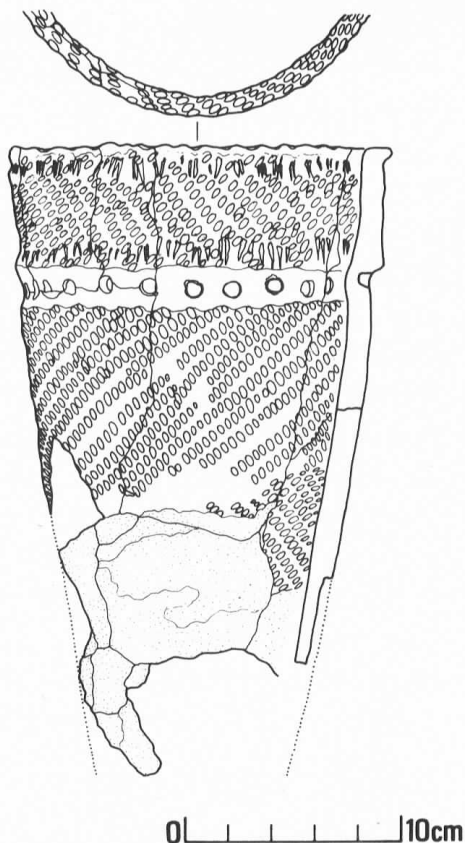
ら上へと突き上げた刺突文がめぐらされている。口唇は平坦で、縄文が施文されている。色調は、上半部が黒褐色、下半部は剥落が著しく褐色を呈し、裏面は茶褐色である。この手の土器は、これまでに類例を知らないが、器形、文様構成、胎土などから見ると北筒式土器前半の資料に類似している。現段階においては、北筒Ⅱ式に含んでおいて良いかと考えられる。

大楽毛砂丘2遺跡 本遺跡は、大楽毛南2丁目の釧路警察学校西側付近に位置する。現在は、既に住宅地となり、砂丘地はその原形を失っている。大楽毛駅からは、ほぼ東に1.4kmの距離にあり、国鉄根室本線が砂丘列の6列目付近を走り、本遺跡は7列目の砂丘列にあたる。海岸までの距離は約500mを計り、砂丘列にはほぼ並行して走る竜神川を挟んで砂丘列の8～10列が走る。本遺跡からは、既に述べたように擦文式土器片が採集されている。

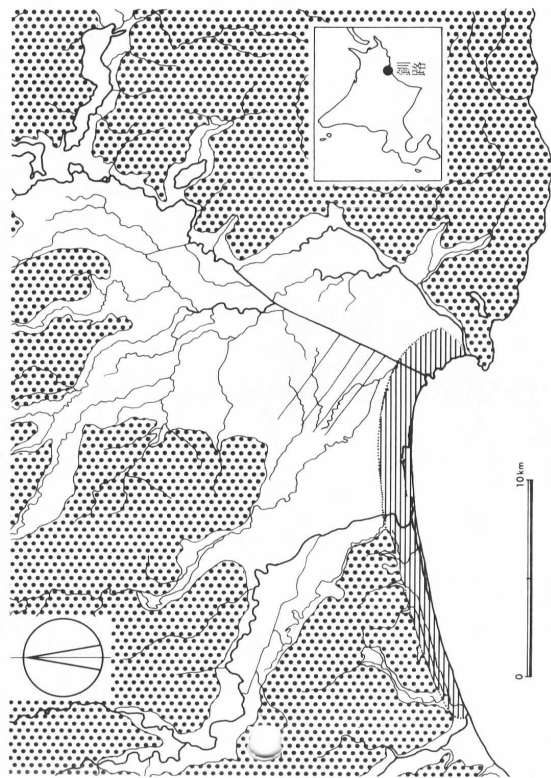
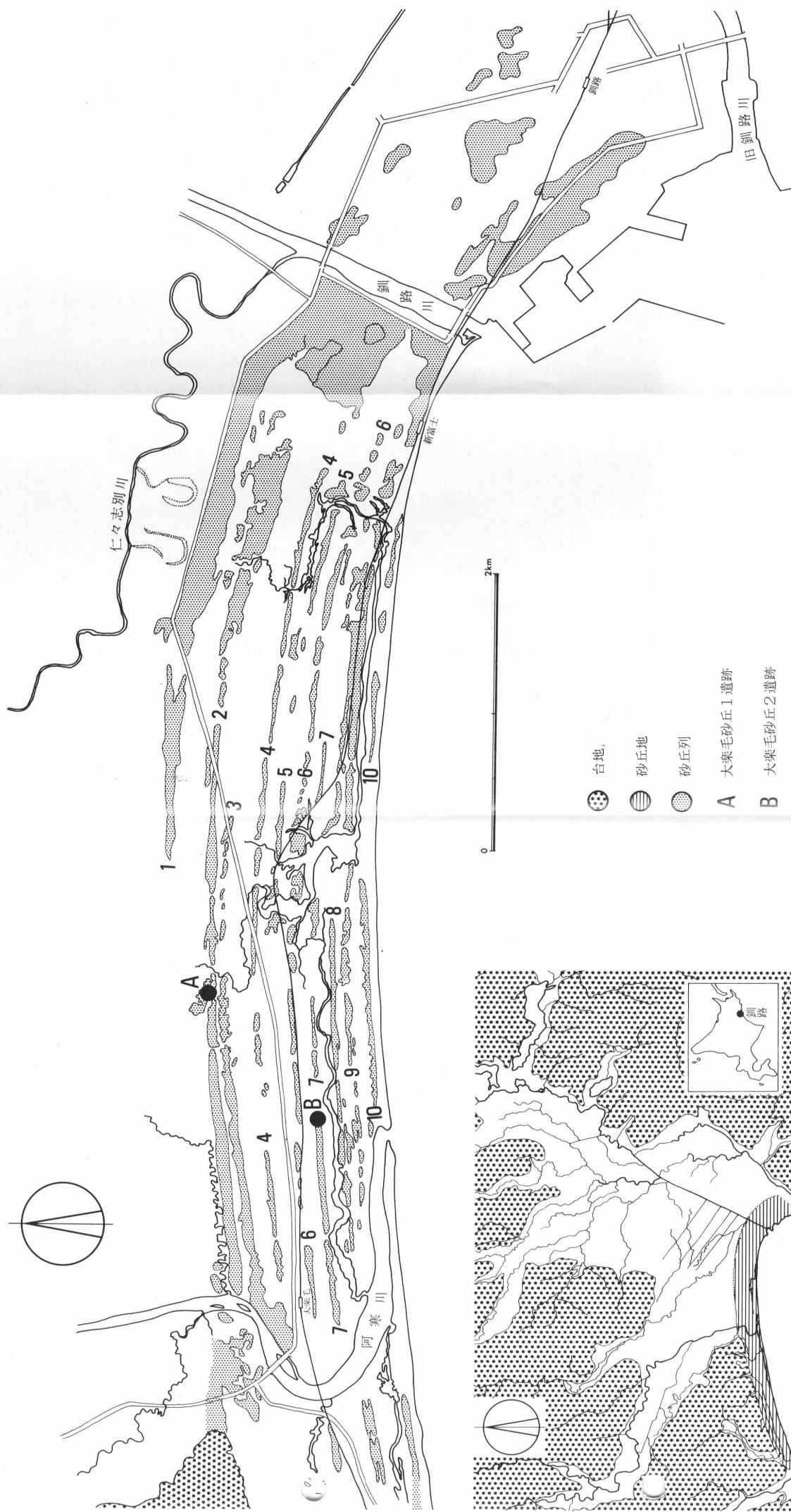
4. 大楽毛周辺の遺跡群

砂丘地の遺跡は、上述したとおり2箇所において擦文文化期、縄文中期の遺跡を確認したが、横走る砂丘列を通じて容易に連絡のとれる西方の大楽毛の台地にもこれらの時期の遺跡が点在している。

砂丘地・湿原に面する台地に4地点にわたって掘りをもつ大楽毛遺跡は、先土器時代から続縄文時代まで継



第1図 大楽毛砂丘1遺跡採集の土器



第2図 砂丘の位置と分布 (岡崎他1966原図による)

続して台地の利用があった重複遺跡である。第1地点ではかつて縄文中期の竪穴様落ち込みが7個ほど確認されており、第3・4地点でも北筒Ⅱ・Ⅲ式土器が出土し、北筒Ⅱ式の竪穴住居址も調査されている。

大楽毛遺跡から北北西へ1.2km釧路空港寄りの沢沿いの舌状台地には、縄文中期と考えられる円形の落ち込み10個をもつ大楽毛竪穴群が位置する。さらに北北西5.6kmにはツル公園遺跡があり、北筒Ⅱ式土器が採集されている。遺物が採集された箇所は、砂丘地とは高低差をもたない沖積低地であり、砂丘地の形成と海退現象を検討する上で極めて興味深いものがある。

擦文時代の遺跡については、大楽毛竪穴群に6軒の竪穴住居址が確認されているのみである。後述するが、この時代の遺跡については、むしろ砂丘地に求める方が妥当ようである。

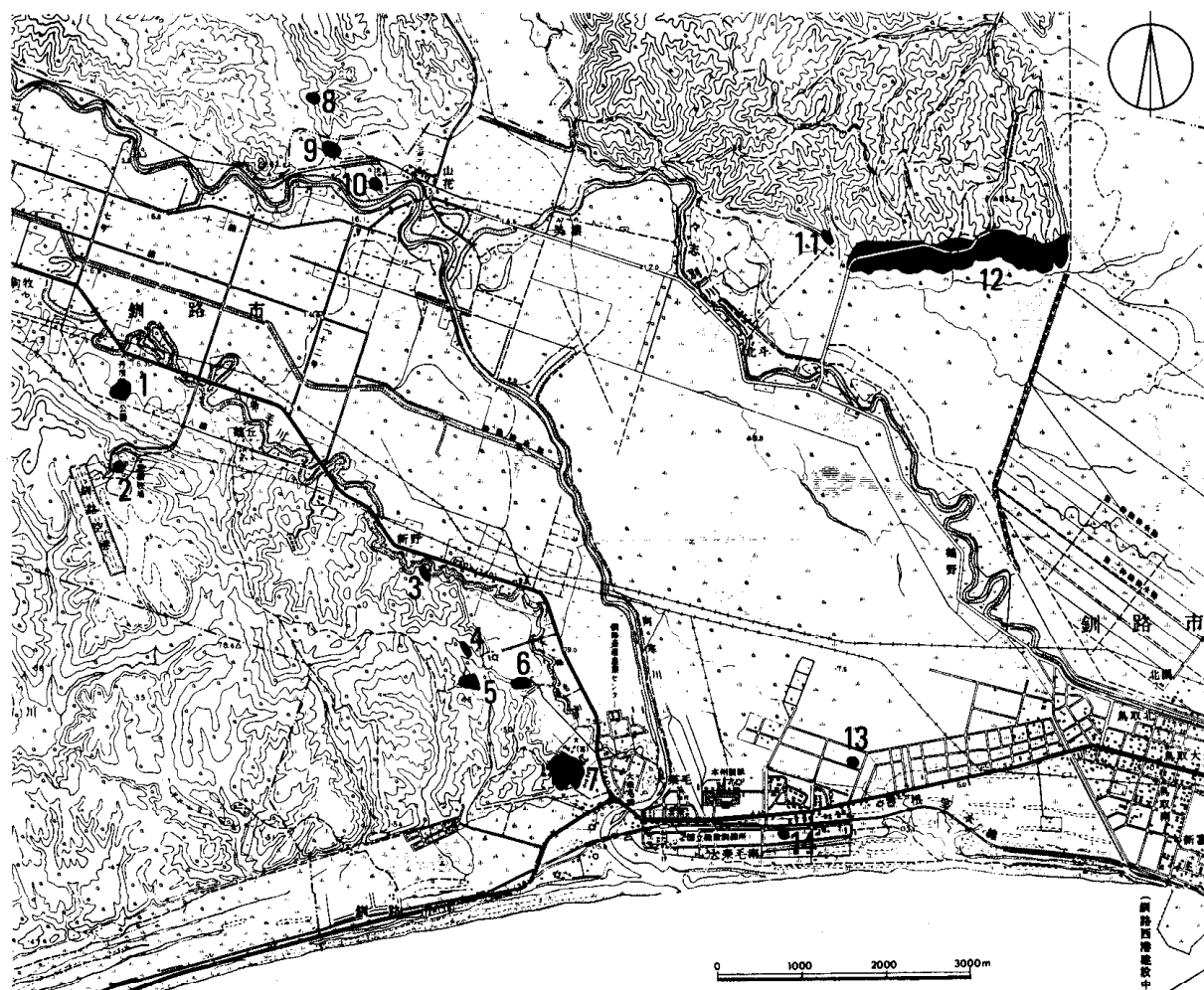
大楽毛の遺跡群とは低湿地帯を挟んで北方7kmに北斗遺跡群があり、縄文中期・擦文文化期の規模の大きな集落址である。北斗遺跡第1地点から西方5.5kmに山花遺跡

群がある。山花小学校裏遺跡で擦文文化期の竪穴住居址と思われる落ち込みが5個あり、山花西遺跡においても擦文文化期の竪穴様落ち込みが確認され縄文中期の土器も出土している。

これら周辺の遺跡群については、大楽毛砂丘を含めた沖積低地の遺跡を考える上で極めて重要な役割を担っているものと思われる。

5. 若干の考察

大楽毛砂丘における遺跡については、既に明治21年、坪井正五郎により、その可能性を窺わせる記載がある(坪井1888)。これによると、大楽毛から釧路へむかう道路の両側に数十の竪穴があり、大小の大きさをもち、八畳敷から十五畳敷ぐらいのものがたくさん見られるという。内容からすると、方形の竪穴群と思われ、擦文文化期の集落址と考えられる。大楽毛・釧路間は、沖積低地が拡がり、該当する地域は砂丘地に限られている。大楽毛砂丘2遺跡の例からも、かつて砂丘地においてこの時代の



第3図 大楽毛砂丘周辺の遺跡

1. ツル公園遺跡 2. 荒磯牧場遺跡 3. 大楽毛射撃場遺跡 4. 大楽毛林道遺跡 5. 大楽毛竪穴群 6. 大楽毛水道山遺跡 7. 大楽毛遺跡 8. オンネピラチャシ 9. 山花西遺跡 10. 山花小学校裏遺跡 11. 北斗遺跡O地点 12. 北斗遺跡

集落が存在したとしても不自然ではない。

大楽毛砂丘2遺跡は、7列目の砂丘列にあたり、少なくとも擦文文化期には7列までの砂丘列が形成されていたことは明らかである。同様に、大楽毛砂丘1遺跡をのせる2列目の砂丘列の形成は、縄文中期北筒Ⅱ式土器以前と考えられ、海進のマキシマム以降とされる砂丘列の形成過程ともほぼ一致する。

大楽毛から西方の庶路では、コイトイ川東側の砂丘地から続縄文文化期の後北C₂~D式とみられる土器と石鏃、石槍、削器などの石器が出土している(富水1972)。庶路付付では、かつて澤により庶路中学校校庭で縄文晩期の土器の出土が確認されており、地点が異なるにせよ砂丘地の土地利用が縄文中期から擦文文化期にかけて継続的におこなわれていた例証といえる。

砂丘地における土地利用を考える上でも、大楽毛周辺の他の沖積低地に位置する遺跡についても検討しなければならない。例えば、ツル公園遺跡は、砂丘地とさほど高低差をもたない沖積低地にあり、背後の段丘面まで拡がりをもつ遺跡である。山花西遺跡でも同様な遺跡立地がみられ、ともに北筒Ⅱ式土器を出土している。沖積低地の遺跡の存在は、縄文海進における東側への傾動と西側の三角州状地の形成で、西側において比較的早く陸化が進んだことにより裏づけられる(岡崎・鈴木1975)。これは縄文中期の小貝塚が湿原東側の台地に集中し、西側では発見されないという傾向とも共通する。この時期の小貝塚は、釧路町岩保木、テンネル、テンネル東、床丹6、釧路市武佐、標茶町塘路二股周辺などで確認されており、いず

れもオオノガイ、カキなどの汽水種からなる小貝塚である。釧路市貝塚町1丁目遺跡においても、貝塚と呼ぶには少量の200個に満たないカキの集中箇所がある。

縄文中期の小貝塚の貝類組成は、海退が進むにつれ古釧路湾が浅い海湾や潟の環境にあった時期とも一致しており、湿原表層の泥炭下にある自然貝層上部の貝類組成より明らかである(岡崎・鈴木1975)。自然貝層上部では、アサリ、オオノガイ、カキなどの汽水種の貝類がみられパシクル沼付近においても、この時期のカキが検出された報告例がある(岡崎1977)。

以上のように、縄文中期には西側の低地の陸化が促進し、砂丘地の形成と共に沖積低地の土地利用が始まったと推測される。道内における砂丘地の遺跡については、石狩海岸砂丘地帯で(上野1978)縄文前期末の円筒下層d式の遺跡、斜里平野の砂丘地にあるオクシベツ川遺跡(小林他1980)で縄文前期に位置するとされる土器が出土し、常呂平野の砂丘地にある栄浦第二遺跡(東京大学文学部1972)で平底の押型文土器が出土しており、縄文前期末には砂丘地の土地利用が行われていたとみることができる。

大楽毛砂丘についても、砂丘を含む西側の沖積低地では、海退に転じた比較的早い時期に生活環境が整い、台地から沖積低地へと居住空間を広げていったものと考えられる。少なくとも、現段階ではその開始を2列目の砂丘列の形成以降に求められ、それ以前に形成された1列目の砂丘列についても、より古い時期の利用を想定できるが、今後さらに広範囲にわたる砂丘地の調査を重ねた上で検討を加えたい。

註) 筆者のひとり澤は、昭和33年当時開催された釧路考古学研究会月例会の席上、安倍寛次氏により新富士海岸に竪穴群があったとの話を伺った。また、佐藤直太郎氏も同様な話をされたが、一方では鉄道工事の土砂取り、明治期のニシン漁小屋の跡ではなかったかともらされ、発掘等を行っていないので分らないとの事であった。

引用・参考文献

- 荒田治他(1979)「斜里平野の地形」知床博物館研究報告第1集
上野秀一(1978)「石狩海岸砂丘地帯の遺跡群について」北海道考古学第14輯
遠藤邦彦・上杉陽(1972)「オホーツク海沿岸トコロ海岸平野の地形・地質」常呂、東京大学文学部
岡崎由夫(1966)「釧路の地質」釧路叢書第7巻
岡崎由夫他(1966)「5万分の1地質図幅説明書・大楽毛」北海道開発庁

岡崎由夫・澤四郎(1974)「自然・先史編」新釧路市史第一巻

岡崎由夫・鈴木順雄(1975)「釧路湿原の地形・地質」釧路湿原総合調査報告書、釧路市立郷土博物館

岡崎由夫(1978)「パシクル沼付近の沖積世の貝化石について」釧路博物館報No. 254

木内信蔵(1963)「常呂付近の自然環境」オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡上巻、東京大学文学部

桑原護(1966)「北筒式土器」考古学雑誌第51巻4号

小林敬他(1980)「オクシベツ川遺跡」斜里町教育委員会

澤四郎他(1962)「東釧路」釧路市教育委員会

澤四郎・西幸隆(1977)「釧路湿原周縁の遺跡分布の変遷」釧路湿原、釧路叢書第18巻

坪井正五郎(1888)「石器時代の遺跡遺物は何物の手に成たか」東京人類学会雑誌第3巻31号

富水慶一(1972)「白糠工業団地コイトイ地区出土の遺物」Shirarika 6. 白糠高等学校郷土研究部